2020年 11 月 21 日（土）

2020年度　IGS 国際セミナーシリーズ（生殖領域）第 3 回

生理の習い方と話し方が生理異常の治療の決定にも影響する？ 日本の女子大生へのインタビューから

Maura Stephens-Chu（マウラ・スティーブンス・チュ）

University of Hawai'i at Mānoa

Abstract

Public awareness of menstrual disorders – such as dysmenorrhea and amenorrhea – has been improving in recent times due to greater media attention and increased medical research. In Japan, a country grappling with the socioeconomic impacts of low birthrates and a shrinking and aging population, media and scientific discourse focus on the effect of these disorders on fertility. In fact, in both scientific and classroom settings, menstruation is linked strongly to fertility, and fertility and motherhood are traditional markers of feminine success. So what does it mean when menstruation does not follow the pattern taught to young girls in school? This paper seeks to address this question from the perspective of young Japanese women attending university in the Tokyo area. Many of these women agree that a ‘normal’ menstrual cycle following a regular pattern is a sign of good reproductive and general health. On the other hand, an irregular menstrual cycle could be a sign that something is ‘wrong’ and that one might have struggles with fertility in the future. However, by exploring women’s own experiences with heavy menstrual flows and irregular menstrual cycles, we see that women’s responses to these issues – their level of concern and the type of treatment they seek (if any) – are extremely varied. I argue that their responses, and their decisions to seek medical treatment or not, are influenced by how they have been taught to think about and to talk about menstruation.

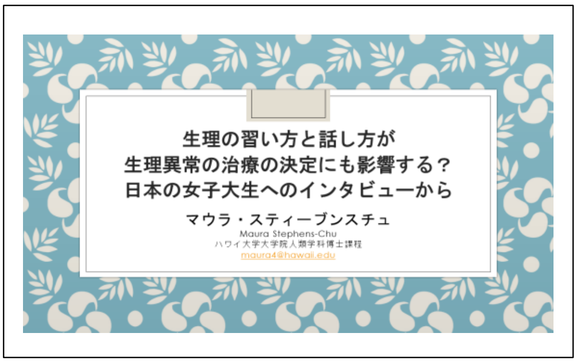
.

要 旨

マスメディアからの注目や医学研究の蓄積が増え、一般の人にも月経困難症や無月経などの月経異常が徐々に知られるようになってきている。日本は少子高齢化社会を背景に、メディアと科学論は月経異常がどのように生殖能力に影響するかを強調している。実際に、科学的方面でも学校教育の現場でも、月経は生殖能力と関連があり、生殖能力と母親になることが女性として大事であると強調する。すると、そう教えられた若い女性たちは、自分の月経周期が学校で習った月経の特徴と異なる場合に悩むことになる。本研究では、日本の東京在住の女子大学生へのインタビューを通して、この問題を考えてみた。インタビュー調査参加者の大半は毎月定期的に月経がくる、つまり月経周期が「普通」であると健康だと思える。一方、不定期の月経周期が現状の健康に問題があると、将来不妊でたいへんなことになるかもしれないと思ってしまう。しかし、女性大学生は重い月経量、月経痛、月経周期不順などの月経異常を経験しても、治療するかどうか人によって違う。彼女たちの対応や治療の決定はおそらく月経について教わった考え方や話し方に関係がある。

はじめに

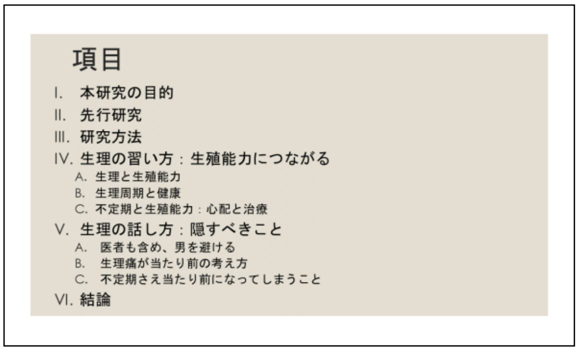
Slide1



現在、米国ハワイ州ハワイ大学大学院社会科学研究科人類学専攻博士課程に在籍しているマウラ・スティーブンス・チュと申します。よろしくお願いします。

本日の報告の流れは以下のようになります。

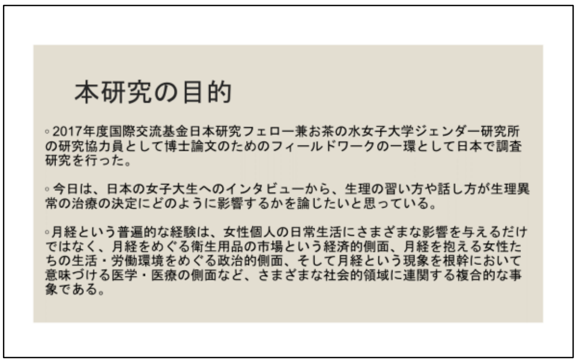
Slide 2



まず全体の本研究の目的を説明し、先行研究と自分の研究方法を述べたいと思います。そして本題である生理の習い方がどのように生殖能力のとらえ方に影響するのか、また生理についてオープンに話せない現状等を紹介し、最後に結論を述べたいと思います。

本研究の目的

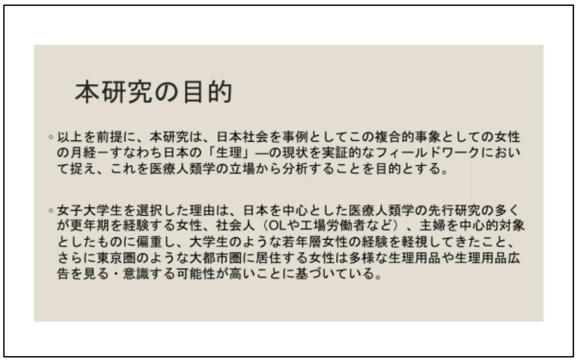
Slide 3



私は 2017 年度国際交流基金日本研究フェロー兼お茶の水女子大学ジェンダー研究所の研究協力員として博士論文のためのフィールドワークの一環として日本で調査研究を行いました。今日は、その時、東京で行った日本の女子大生へのインタビューから、生理の習い方や話し方が生理異常の治療の決定にどのように影響するかについてお話したいと思います

月経という普遍的な経験は、女性個人の日常生活にさまざまな影響を与えるだけではなく、月経をめぐる衛生用品の市場という経済的側面、月経を抱える女性たちの生活・労働環境をめぐる政治的側面、そして月経という現象を根幹において意味づける医学・医療の側面など、さまざまな社会的領域に連関する複合的な事象です。そのため、月経の経験がいかに社会化され、経済化され、政治化され、制度化され、医療化されているのかを理解することにより、女性たちが属する当該社会（当該国家）において女性の身体がいかに意味づけられているかを探り、延いては、それをある種のリトマス試験紙として当該社会（当該国家）の特質の解明にも議論を進めることも可能であると考えられます。

Slide 4



以上を前提に、本研究は、日本社会を事例としてこの複合的事象としての女性の月経ーすなわち日本の「生理」—の現状を実証的なフィールドワークにおいて捉え、これを医療人類学の立場から分析することを目的としています。日本人女性が日常的な生活でどのように月経を経験するのかという、ミクロな女性個人の経験を基点に、月経を通じた女性身体の医療化の問題、生理休暇を含む制度的・政策的対応、衛生用品をめぐる市場の形成と産業化の問題、月経をめぐるメディアの言説の形成などマクロな社会的要因を探り、マクロな要因が女性の経験にどのように影響を及ぼし、日本において「生理」という概念を構築してきたのかについて研究を進めることにしました。

また、本研究では、具体的な調査対象を東京圏在住・通学の女子大学生にしました。女子大学生を選択した理由は、日本を中心とした医療人類学の先行研究の多くが、調査対象者を、更年期を経験する女性、社会人（OL や工場労働者など）、主婦に偏重していて、大学生のような若年層女性の経験を軽視してきたことと、さらに東京圏のような大都市圏に居住する女性は多様な生理用品や生理用品広告を見る・意識する可能性が高いからです。女子大生は、実際の就職による社会的参画を目前に控えて景気や政治の動向に敏感に反応し、将来に関する重要な意思決定の岐路に立つ「未分化」な存在です。そこで彼女たちの自己の身体経験の意味づけの過程を彼女たちが抱く将来の目的と期待とも連動させて分析を試みることにしました。

女性の生殖健康に関する医療人類学的先行研究

Slide 5

社会科学において、生理は世界中のほとんどの女性が 30 年間以上毎月経験することにもかかわら

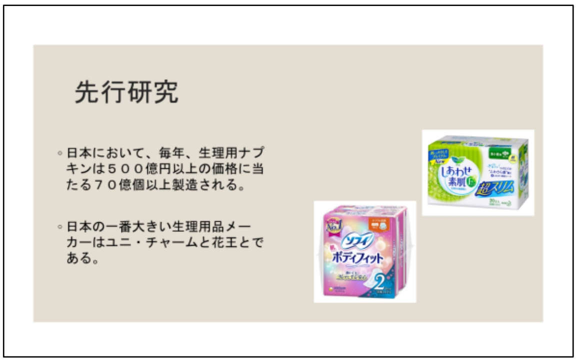
ず、人類学や科学技術研究の分野において、生殖補助技術（ART）をはじめ、女性の健康をめぐる問題はよく調査されていますが、なぜか生理はあまり注目されてきませんでした。20 世紀、フェミニスト人類学が発達する中、生理に触れる様々なエスノグラフィーが出版されましたが、主に先進国ではなく、東南アジアや北アメリカ大陸の先住民に限る研究でした。その上、女性の個人的な経験は含まれていても、生理をめぐるタブーと宗教的な信仰の方が強調されていました。しかし、こういう傾向の例外としてエミリー・マーティンの研究があります。マーティンはアメリカにおける医学の資料の分析と女性とのインタビューを通し、生理や妊娠など女性の生殖機能の医学化を研究し、医学の分野における女性の体と機能への負のイメージを伝え、女性がそのイメージに影響を受けていると論じていました。

Slide 6

日本における生理を中心とした研究は日本語の文献はもとより英語の文献も決して多くありません。英語の資料は先に述べたエスノグラフィーのように、タブーや伝統的な習慣を強調する傾向があります。

日本語の資料は人類学の研究と言えないかもしれませんが、英語の資料よりも日本における生理と生理用品の歴史と個人的な経験を詳しく調査していると思われます。例を挙げれば、小野千佐子は生理が古事記で述べられたことを論じており、昔から現代まで女性が生理を処置するためにどのような物を用いたか説明しています。小野清美も 20 世紀の生理用品の歴史を論じていて、また、80 年代に女子大学生を対象としたアンケート調査を行っています。アンケートは生理の経験、生理用品、生理用品の CM にも触れていました。それに、坂井素子は生理用品をめぐる経験について 30 年代から 60 年代までに生まれた女性にインタビューを行っています。しかし、現代の女性を対象とした人類学の研究は私が調べた限りではまだありません。

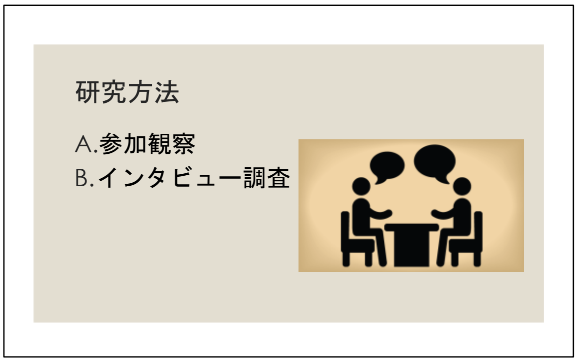
Slide 7



日本にはアメリカのように大きい生理用品企業があり、生理用品広告がテレビでよく放送されています。日本において、毎年、生理用ナプキンは 500 億円以上の市場で、70 億個以上製造されています。日本の一番大きい生理用品メーカーはユニ・チャームと花王です。女性たちの立場からみると、これらのメーカーの生理用品は快適な生活をおくる上で不可欠で大事なものです。しかし、生理用品は人類学の研究ではあまり論じられていません。

研究方法

Slide 8

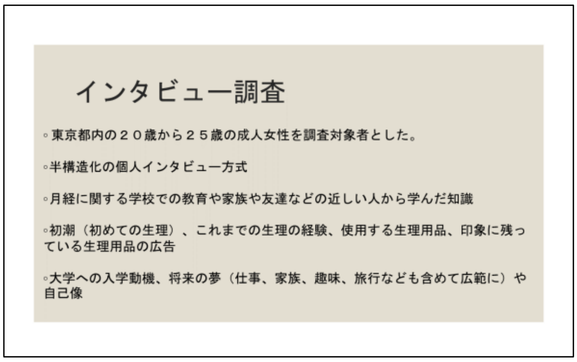


Slide 9

Slide 10

日本滞在期間に生理用品に関する広告や女性の生理に関する社会的な言説の情報を集めるために、日常生活における女性たちの暮らしの様子を参与観察しました。サークルの活動に参加することによって、研究参加者を募集し、女子大学生の暮らし方がもっと分かるようになりました。それに加え、生理処理用品企業の様々な愛用者向けのイベントにも参加しました。

Slide 11

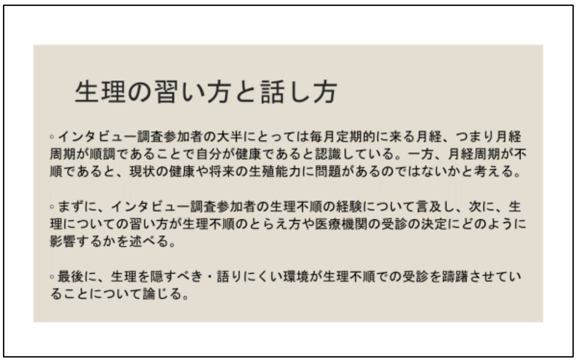


インタビュー調査では、東京都内の２０歳から２５歳の成人女性を調査対象者としました。調査対象者の募集は都内の大学キャンパスで協力依頼のチラシを配布するとともに、私が個人的に知己を得た成人女性に協力を依頼し、協力の意思のある方に私に連絡してもらう方式をとりました。また、これらの協力者を基点にスノーボーリングサンプル方式で協力者を拡大しました。

インタビューの所要時間は最短５０分で、最長１時間 30 分程度でした。インタビューは月経を中心とした経験や知識について、半構造化の個人インタビュー方式で行いました。インタビューでは、月経に関する学校での教育や家族や友達などの近しい人から学んだ知識について詳しく質問し、それに加えて、初潮（初めての生理）、これまでの生理の経験、使用する生理用品、印象に残っている生理用品の広告などについても尋ねました。併せて、大学への入学動機、将来の夢（仕事、家族、趣味、旅行なども含めて広範に）や自己像についても質問しました。

不順・不定期の経験―インタビュー調査

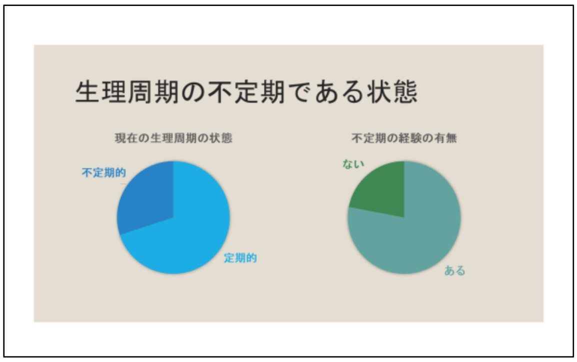
Slide 12



まずは生理の習い方と話し方が生理異常の治療の決定にどのように影響するかをみてみましょう。インタビュー調査参加者の大半にとっては毎月定期的に来る月経、つまり月経周期が順調であることで自分が健康であると認識しています。一方、月経周期が不順であると、現状の健康や将来の生殖能力に問題があるのではないかと考えます。しかし、女性大学生は重い月経量、月経痛、月経不順などの月経異常を経験しても、医療機関を受診するかどうかは人によって異なっていました。治療の決定はおそらく月経について教わった考え方と話し方に関係があると思われます。

まずに、インタビュー調査参加者の生理不順の経験について言及し、次に、生理についての習い方が生理不順のとらえ方や医療機関の受診の決定にどのように影響するかを述べたいと思います。そして最後に、生理を隠すべき・語りにくい環境が生理不順での受診を躊躇させていることについても言及したいと思います。

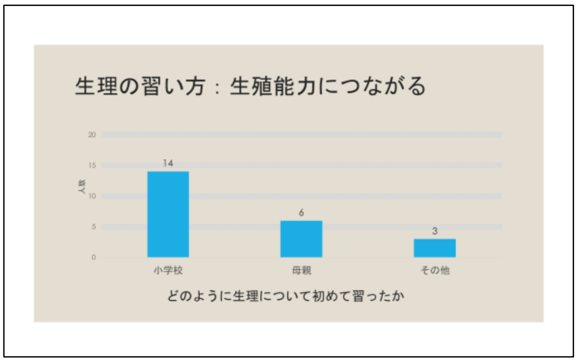
Slide 13



初潮の後、数か月間から数年間経つまでは、生理周期が不定期になりやすいと言われています。それに、ストレスや栄養不足などが生理周期に影響を及ぼすことも知られています。研究参加者の 20 人の結果も例外ではありませんでした。現在生理周期が定期的である人は 16 人でしたが、生理不順の経験がある人は 18 人いました。それで、16 人のうち 2 人だけがずっと定期的に生理が来ていて、4 人は初潮から現在までずっと不順の状態でした。

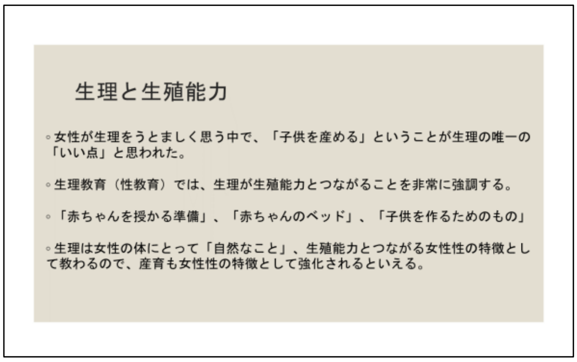
生理の習い方：生殖能力につながる

Slide 14



まず初めに、インタビューに協力してくださった女性たちははじめ、生理についてどのように習ったのでしょうか。半分以上は小学校の保健の授業で習ったといいます。たいていは男女別の授業で、女の子は生理の仕組みや生理用ナプキンの使い方を教えられていました。20 人の女性たちはすべてこのような授業を受けていましたが、6 人はその授業を受ける前に、母親から教えられていました。その他に、1 人は友達から生理について聞き、もう 1 人は祖母に教えられていました。小学生向けの少女漫画の雑誌を読んだ際に、初めて生理について知ったと言う人もいました。

Slide 15

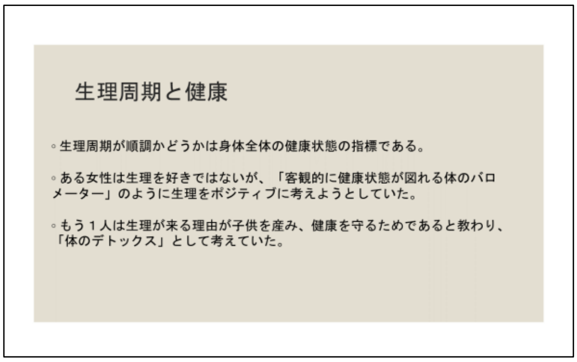


インタビューの際、「まだ生理を経験したことがない女の子に生理を説明するとしたら、どのように説明するか」という質問を入れました。全般的に、調査参加者は自分自身が生理について教わったように説明するといいました。そして一番多かった回答は「子供を産むために必要なこと」という説明をするというものでした。女性が生理をうとましく思う中で、「子供を産める」ということが生理の唯一の「いい点」と思われます。

生理教育、また性教育では、生理が生殖能力とつながることを非常に強調します。「赤ちゃんを授かる準備」、「赤ちゃんのベッド」、「子どもを作るためのもの」というように生理や経血が説明されたといいます。初潮は思春期の生理的な変化の一つであるので、言うまでもなく、生理の仕組みを性教育の基本と共に教わるのでしょう。生理は女性の体にとって「自然なこと」、生殖能力とつながる女性性の特徴として教わるので、産育も女性性の特徴として強化されるといえます。

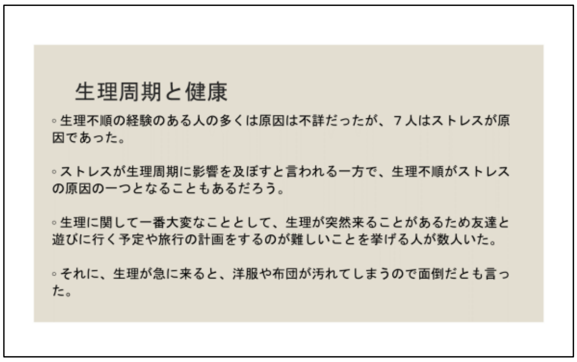
生理周期と健康

Slide 16



それに従って、多くのインタビュー調査参加者は生理不順の経験のあるなしに関わらず、生理周期が体調や生殖能力の機能を反映していると思っていました。つまり、生理周期が順調かどうかは身体全体の健康状態の指標なのです。不順の人は、特に不順の原因が不明の人は、健康状態を不安に思っていました。極めて生理不順がひどい人は将来子供が産めるかどうかも心配しているようでした。反対に、生理周期が順調であると、健康で体がちゃんと働いている証と考えているようでした。

Slide 17

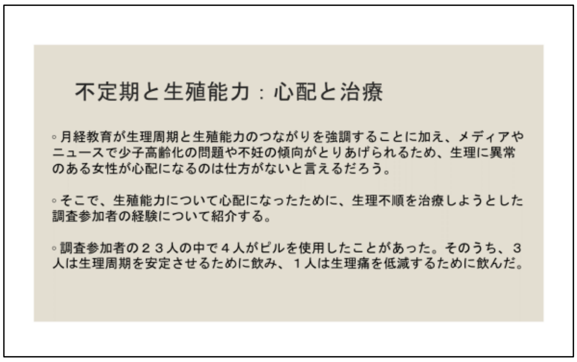


このような考え方の例をいくつか挙げてみましょう。ある女性は生理を好きではないが、「客観的に健康状態が図れる体のバロメーター」のように生理をポジティブに考えようとしていました。他の人も月経不順なので、「体の状態が分かる」と言っていました。またある人は生理が来る理由が子どもを産み、健康を守るためであると教わり、「体のデトックス」として考えていました。

生理不順の経験のある人の多くは、原因は不詳でしたが、7 人はストレスが原因でした。1 人は高校時代に生理が来なくなった経験があり、やせすぎだったからだと言っていました。他の女性も高校時代に生理不順だったが、過度なダイエットや運動が原因だったと言っていました。ストレスが生理周期に影響を及ぼすと言われる一方で、生理不順がストレスの原因の一つとなることもあるでしょう。また生理に関して一番大変なことの中に、生理が突然来ることがあるため、友達と遊びに行く予定や旅行の計画を立てるのが難しいことを挙げる人が数人いました。それに、生理が急に来ると、洋服や布団が汚れてしまうので面倒だという人もいました。

不定期と生殖能力：心配と治療

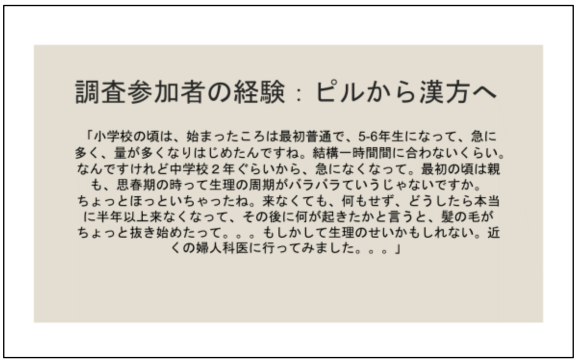
Slide 18



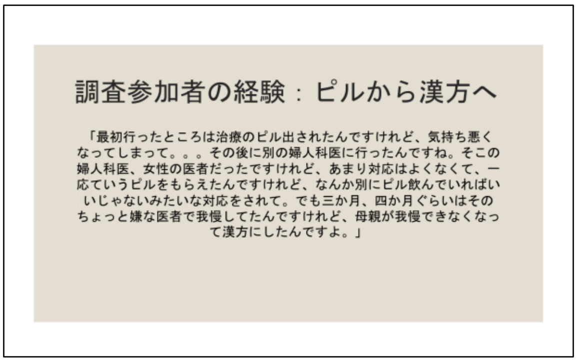
生理不順はたしかに面倒と言えるでしょう。でも、布団が汚れることよりも、もっと重大な問題が潜んでいる恐れがあります。月経教育が生理周期と生殖能力のつながりを強調することに加え、メディアやニュースで少子高齢化の問題や不妊の傾向がとりあげられるため、生理に異常のある女性が心配になるのは仕方がないと言えます。つまり、生理の習い方は生理異常の際の医療機関の受診の決定に影響を与えているのです。そこで、生殖能力について心配になったために、生理不順を治療しようとした調査参加者の経験について紹介したいと思います。「治療」というのは医者に行くことだけでなく、食事の変化や商品の使用も含まれています。しかし、これから紹介する例は医療機関を訪れた事例を中心に紹介します。

調査参加者の２３人の中で４人がピルを使用したことがありました。そのうち、３人は生理周期を安定させるために飲み、１人は生理痛を低減するために飲んでいました。

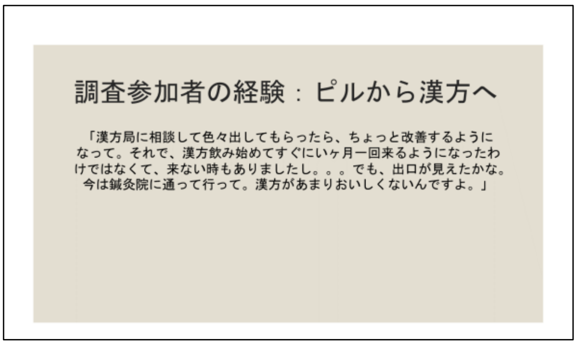
Slide 19



Slide 20



Slide 21



次の引用文はその中の１人が話してくれたことです。

「小学校の頃は、始まった頃は最初普通で、5、6 年生になって、急に多く、量が多くなりはじめたんですね。結構一時間間に合わないくらい。なんですけれど中学校 2 年ぐらいから、急になくなって。最初の頃は親も、思春期の時って生理の周期がバラバラっていうじゃないですか。ちょっとほっといちゃったね。来なくても、何もせず、そうしたら本当に半年以上来なくなって、その後に何が起きたかと言うと、髪の毛がちょっと抜け始めたって。もしかして生理のせいかもしれない。近くの婦人科医に行ってみました。」

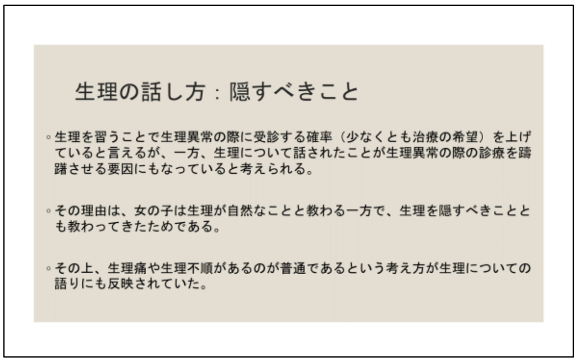
「最初行ったところは治療のピル出されたんですけれど、気持ち悪くなってしまって。その後に別の婦人科医に行ったんですね。そこの婦人科医、女性の医者だったですけれど、あまり対応はよくなくて、一応ていう、ピルをもらえたんですけれど、なんか別にピル飲んでいればいいじゃないみたいな対応をされて。でも 3 か月、4 か月ぐらいはそのちょっと嫌な医者で我慢してたんですけれど、母親が我慢できなくなって漢方にしたんですよ。」

「漢方局に相談して色々出してもらったら、ちょっと改善するようになって。それで、漢方飲み始めてすぐに１ヶ月一回来るようになったわけではなくて、来ない時もありましたし。でも、出口が見えたかな。今は鍼灸院に通って行って。漢方があまりおいしくないんですよ。」

これがこの方が話してくれた経験です。

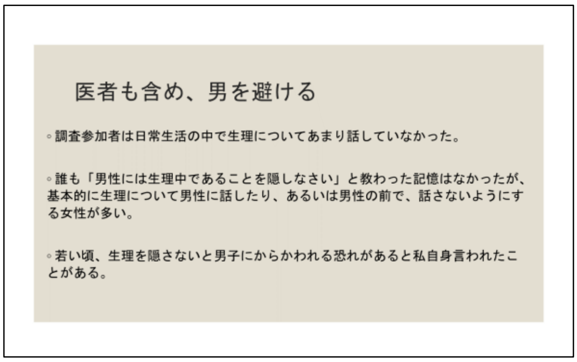
生理の話し方：隠すべきこと

Slide 22

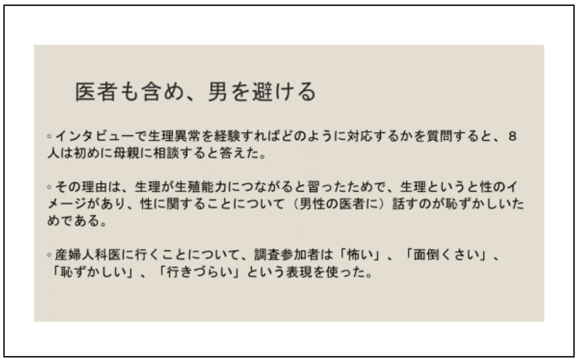


生理を習うことで生理異常の際に医療機関を受診する確率、少なくとも治療を希望する機会を上げていると言えます。でも一方で、生理について話されたことが生理異常の際の診療を躊躇させる要因にもなっていると考えられます。その理由は、女子は生理が自然なことと教わる一方で、生理を隠すべきこととも教わってきたためです。その上、生理痛や生理不順があるのが普通であるという考え方が生理についての語りにも反映されていました。

Slide 23



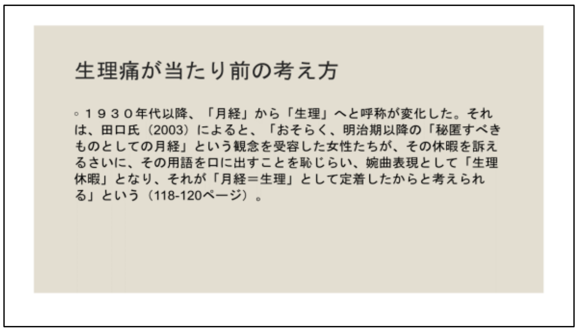
Slide 24



調査参加者は日常生活の中で生理についてあまり話をしていませんでした。全然話さないわけではないのですが、たいていは不快感についての愚痴を言ったり、ナプキンを分けてほしいといったことで、相手は女性の家族と友達に限られていました。主に、生理が隠すべきことというのは、はっきり教わるのではなく、暗黙的に教わっていました。誰も「男性には生理中であることを隠しなさい」と教わった記憶はないのですが、基本的に生理について男性に話したり、あるいは男性の前で話さないようにする女性が多いといえます。私自身も若い頃、生理を隠さないと男子にからかわれる恐れがあると言われたことがあります。ある参加者はからかわれた経験があるせいで、生理であることを知られたくないとか、言われたくないと思うようになったと言っていました。しかし、男性が生理の経験をあまり理解しないのを、残念なことだと述べた参加者も少なくありませんでした。

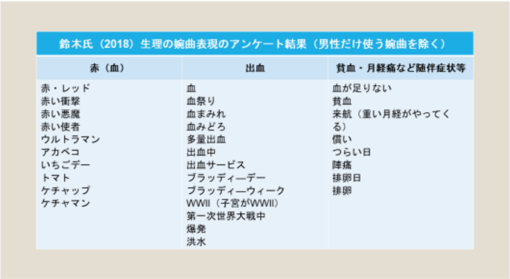
以上述べたように、生理不順を含む月経異常を経験したことがある調査参加者が多くいたのですが、大半は医者に相談したことはありませんでした。インタビューで生理異常を経験すればどのように対応するかを質問すると、８人は初めに母親に相談すると答えました。あるいは、姉に相談したり、インターネットで検索したりし、解決できなければ産婦人科医に行くつもりだと言っていました。その理由は、生理が生殖能力につながると習ったためで、生理というと性のイメージがあり、性に関することについて男性の医者に話すのが恥ずかしいというのがその理由です。産婦人科医に行くことについて、調査参加者は「怖い」、「面倒くさい」、「恥ずかしい」、「行きづらい」という表現を使っていました。

Slide 25



「生理」という現象は英語と同じように日本語にも婉曲表現や様々な隠語があります。1930 年代以降、「月経」から「生理」へと呼称が変化しました。それは、田口氏によると、「おそらく、明治期以降の「秘匿すべきものとしての月経」という観念を受容した女性たちが、その休暇を訴える際に、その用語を口に出すことを恥じらい、婉曲表現として「生理休暇」となり、それが「月経＝生理」として定着したからと考えられる」といいます。

Slide 26

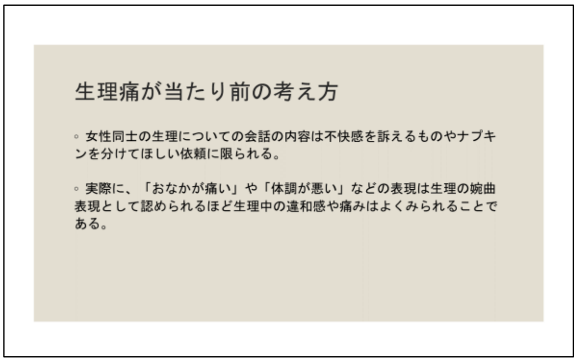


鈴木氏（2018）生理の婉曲表現のアンケート結果（男性だけ使う婉曲を除く）		
赤（血）	出血	貧血・月経痛など随伴症状等
赤・レッド 赤い衝撃 赤い悪魔 赤い使者 ウルトラマン アカベコ いちごデー トマト ケチャップ ケチャマン	血 血祭り 血まみれ 血みどろ 多量出血 出血中 出血サービス ブラッディ—デー ブラッディ—ウィーク WWII（子宮がWWII） 第一次世界大戦中 爆発 洪水	血が足りない 貧血 来航（重い月経がやってくる） 償い つらい日 陣痛 排卵日 排卵

私は具体的に調査参加者に生理の婉曲表現については質問しませんでしたが、鈴木氏は 2005 年から自ら女子大学生にアンケート調査を行っています。2012 年からは、男子大学生にもアンケートを行っています。その結果を次のテーマに区別しました：初経、英俗語、外来語略、代名詞、女、擬人化、客、月、赤・血、出血、貧血月経痛など随伴症状、女性の様子、生理用品、その他です。鈴木氏によると、直接的に話すか婉曲的に話すか、どちらを選択するかは場合と相手によって違うといいます。以下の表をご覧になればわかるように、生理痛や特に出血量の多さを強調する傾向があります。痛みや不便のせいで生理が面倒で嫌だと考えられていることを表しています。

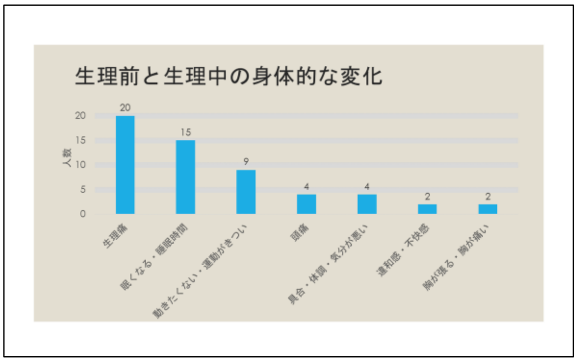
鈴木氏（2018）生理の婉曲表現のアンケート結果（男性だけ使う婉曲を除く）		
赤（血）	**出血**	**貧血・月経痛など随伴症状等**
赤・レッド	血	血が足りない
赤い衝撃	血祭り	貧血
赤い悪魔	血まみれ	来航（重い月経がやってくる）
赤い使者	血みどろ	償い
ウルトラマン	多量出血	つらい日
アカベコ	出血中	陣痛
いちごデー	出血サービス	排卵日
トマト	ブラッディ—デー	排卵
ケチャップ	ブラッディ—ウィーク	
ケチャマン	WWII（子宮が WWII）	
	第一次世界大戦中	
	爆発　洪水	

Slide 27



女性同士の生理についての会話の内容は不快感を訴えるものやナプキンを分けてほしいといったようなことに限られています。実際に、「おなかが痛い」や「体調が悪い」などの表現は、生理の婉曲表現と認められるほどです。生理中の違和感や痛みはよくみられることでもあります。

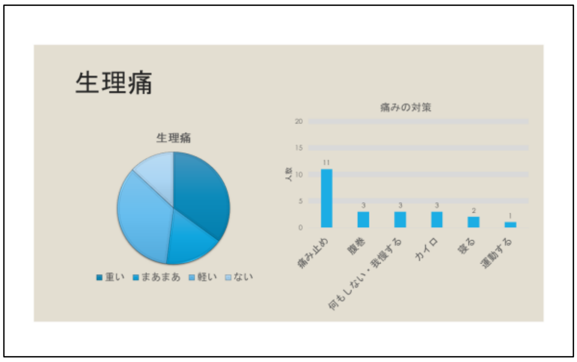
Slide 28



20 人に生理前と生理中の体の変化について質問しました。以下の表にはその痛みや違和感に関する症状が含まれています。一番多いのは生理痛で 85%の人があげていました。生理が来る直前から生理の 3 日目まで起こることが多いようです。それに、生理痛は経血の量の多さとも関連しています。生理痛があり、経血量が多く、疲れているため動きたくなくなるという方も結構いました。

生理前と生理中の身体的な変化	人数【N＝20】
生理痛	17（85%）
眠くなる・睡眠時間	13（65%）
動きたくない・運動がきつい	9（45%）
頭痛	4（20%）
具合・体調・気分が悪い	3（15%）
違和感・不快感	2（10%）
胸が張る・胸が痛い	2（10%）

Slide 29

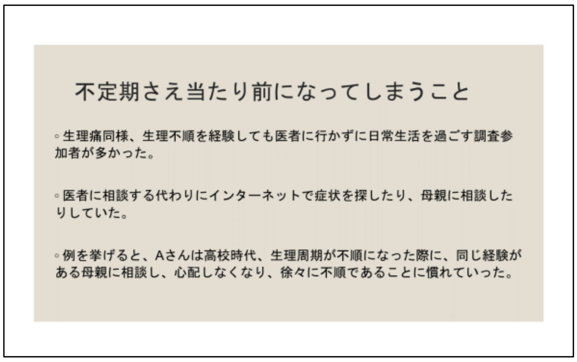


多くの人が経験する生理痛についてもさらにみていきましょう。この表をご覧になれば分かるように、生理痛が重い人は 7 人、重くはないが軽いというわけでもない人は 6 人、軽い人は 4 人で、3 人には生理痛がありませんでした。そして様々な方法で鎮痛していることがわかりました。生理痛がある 17 人のうちに 11 人が痛み止め薬を飲み、3 人は腹巻、2 人はカイロも使っていました。その他に、痛みを感じないように寝てしまう人が 2 人、単に我慢する人が 3 人でした。しかし、生理痛がきつい人も含めて、誰も生理痛の治療のために医者に行った人はいませんでした。これは男性の医者のところに行くのをためらうためで、生理痛がどんなに苦しくてもこれが一般的な考え方をあらわしています。

生理痛	人数【N=20】
重い・キツイ	7（35%）
まあまあ	6（30%）
軽い・違和感ほど	4（20%）
なし	3（15%）

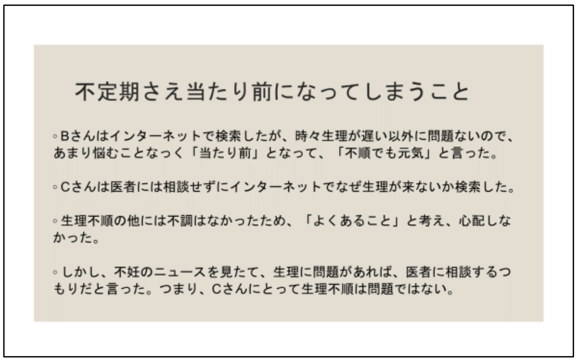
痛みの対策	人数【N=17】
痛み止め	11（64.7%）
腹巻	3（17.6%）
何もしない・我慢する	3（17.6%）
カイロ	2（11.8%）
寝る	2（11.8%）
運動する	1（5.9%）

Slide 30



生理痛同様、生理不順を経験しても医者に行かずに日常生活を過ごす調査参加者が多くいました。以上述べたように、18 人が生理不順の経験があったのですが、医者の治療を受けた方は４人しかいませんでした。医者に相談する代わりにインターネットで症状を探したり、母親に相談したりしていました。例を挙げると、A さんは高校時代、生理周期が不順になった際に、同じ経験がある母親に相談し、心配しなくなり、徐々に不順であることに慣れていったといいます。

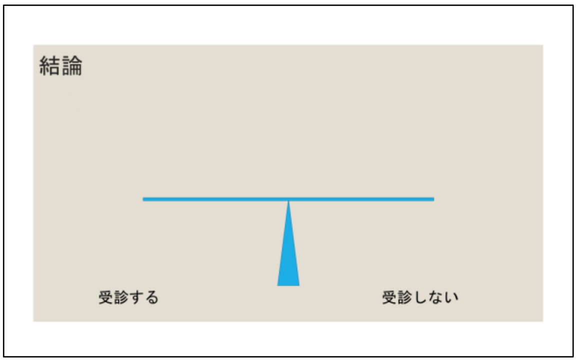
Slide 31



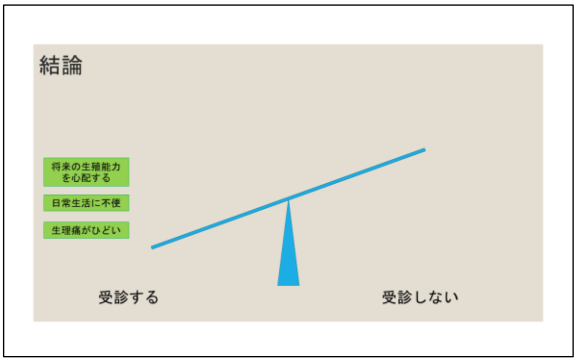
B さんはインターネットで検索して、時々生理が遅い以外に問題なかったので、あまり悩むことなっく「当たり前」となって、「不順でも元気」と言っていました。C さんも高校時代から大学二年まで生理不順でしたが、B さんと同様、医者には相談せずに、インターネットでなぜ生理が来ないか検索し、栄養不足や痩せすぎが生理不順の原因になることがあると知りました。そしてこのような原因は自分には当てはまらないし、生理不順の他には不調はなかったため、「よくあること」と考え、心配しませんでした。しかし、不妊のニュースを見たことで、生理に問題があれば、医者に相談するつもりだと言っていました。つまり、C さんにとって生理不順は問題ではなかったのです。

結論

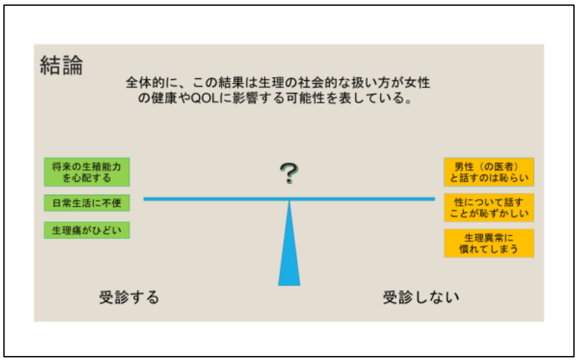
Slide 32



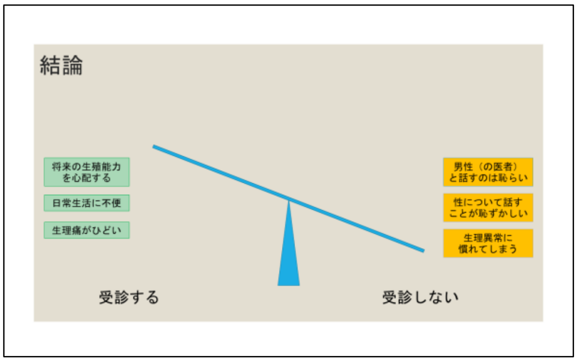
Slide 33



Slide 34



Slide 35



まとめに入りたいと思います。生理教育が、生理異常が生殖能力に影響する可能性があることを意識させるようになるということがわかりました。それに加え、母性は社会的に意義が認められているために、生理異常を経験する女性たちの中には、将来の生殖能力を心配する人が少なくありませんでした。しかし、受診したくても、生理の話をするのには様々な障壁があることもわかりました。一つ目は生理について男性の医者と話すことに恥じらいがあり、なるべく避けようとする傾向がみられました。二つ目は生理の習い方を通して生理が生殖能力につながり、言うまでもなく生殖能力は性と結びついているので、性について話すことが恥ずかしく、産婦人科医に相談しづらくなっていることもわかりました。さらに、婉曲表現の使用や女性同士、特に母子間の会話を通して、生理痛や生理不順はよくあることだという考え方が広められていました。又、生理異常に慣れてしまい、問題ではないと考えるようになった人もいました。こうしたことから、生理の社会的な扱い方が女性の健康や QOL に影響する可能性を表していると言えます。

Slide 36

まずに、このセミナーにご招待くださった仙波由加里先生にお礼申し上げます。また国際交流基金の提供でこの研究プロジェクトを行うことができました。国際交流基金にも感謝したいと思います。そして、私の研究を応援くださった指導教官・受入教員の棚橋訓先生、さらにお茶の水女子大学ジェンダー研究所の皆様に心よりお礼申し上げたいと思います。そして、相談に乗ってくださった大学院生の友人の皆様のサポートと、最後に、研究協力者の皆様に心より感謝を申し上げたいと思います。

参考文献

Buckley, Thomas, and Alma Gottlieb. 1988. *Blood Magic: The Anthropology of Menstruation*. Berkeley: University of California Press.

Dan, Alice. 1986. "The Law and Women's Bodies: The Case of Menstruation Leave in Japan." In *Culture, Society, and Menstruation*, edited by Virginia L. Olesen and Nancy Fugate Woods, 1-14. Washington: Hemisphere Publishing Corporation.

Hardacre, Helen. 1999. "The Shaman and Her Transformations: The Construction of Gender in Motifs of Religious Action." In *Gender and Japanese History, vol. 1: Religion and Customs / The Body and Sexuality*, edited by Haruko Wakita, Anne Bouchy, and Chizuko Ueno, 87-119. Osaka: Osaka University Press.

Hoskins, Janet. 2002. "The Menstrual Hut and the Witch's Lair in Two Eastern Indonesian Societies." *Ethnology* 41 (4): 317-333.

Inhorn, Marcia, and Daphna Birenbaum-Carmeli. 2008. "Assisted Reproductive Technologies and Culture Change." *Annual Review of Anthropology* 37: 177-196.

Levine, Nancy E. 2008. "Alternative Kinship, Marriage, and Reproduction." *Annual Review of Anthropology* 37 (1): 375-389.

Martin, Emily. 1992. *The Woman in the Body: A Cultural Analysis of Reproduction*. Boston: Beacon Press.

Namihira, Emiko. 1987. "Pollution in the Folk Belief System." Supplement, "An Anthropological Profile of Japan," *Current Anthropology* 28 (4): S65-S74.

Ono, Chisako. 2009. "Nuno napukin wo tsūjita gekkeikan no hen'yō ni kan suru kenkyū – 'Sonzai suru gekkei' he no sentakushi wo motomete [A study on transformation of attitudes toward menstruation through the use of cloth sanitary napkins : seeking alternatives to 'visiblify menstruation']." *Doshisha University Policy & Management* 11 (2): 149-162.

Ono, Kiyomi. 1984. "Joshi gakusei to seiri yōhin (dai 2 hō) – Hongaku gakusei wo taishō toshita jittai chōsa [Female Students and Menstrual Products (Part 2) – A Factual Investigation of Students of This University]." *Chiba Kenritsu Eisei Tanki Daigaku Kiy*ō 3 (1): 55-60.

Ono, Kiyomi. 1985. "Joshi gakusei to seiri yōhin (dai 3 hō) – Hongaku gakusei wo taishō toshita jittai chōsa [Female Students and Menstrual Products (Part 3) – A Factual Investigation of Students of This University]." *Chiba Kenritsu Eisei Tanki Daigaku Kiy*ō 4 (1): 33-37.

Ono, Kiyomi. 2006. *Seiri yōhin no 45 nen no kiseki [Tracks of Sanitary Items of 45 Years]*. Okayama, Japan: Fukurō Shuppan.

Ono, Kiyomi, Setsuko Yamada, and Michiko Ishikawa. 1983. "Joshi gakusei to seiri yōhin – Hongaku gakusei wo taishō toshita jittai chōsa [Female Students and Menstrual Products – A Factual Investigation of Students of This University]." *Chiba Kenritsu Eisei Tanki Daigaku Kiy*ō 2 (1): 89-95.

Pedersen, Lene. 2002. "Ambiguous Bleeding: Purity and Sacrifice in Bali." *Ethnology* 41 (4): 303-315.

Rapp, Rayna. 2011. "Reproductive Entanglements: Body, State, and Culture in the Dys/regulation of Child

bearing." *Social Research* 78 (3): 693-718.

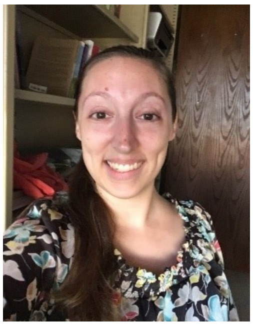
Sakai, Motoko. "Kami Napukin no Tanjō ni Yoru Gekkei Keiken no Henka – Anne Sedai no Shōgen kara Saguru [Changes in Menstrual Experiences due to the Birth of the Paper Sanitary Napkin – Investigations of Testimony from the '*Anne* Generation']." *Bunka Kankyō Kenkyū* 7 (2014): 68-78.

Suzuki, Akiko. 2018. *Onna no shintairon: gekkei, san'iku, kurashi [Discourse on Women's Bodies: Menstruation, Birth and Childrearing, Life]*. Tokyo: Iwata shoin.

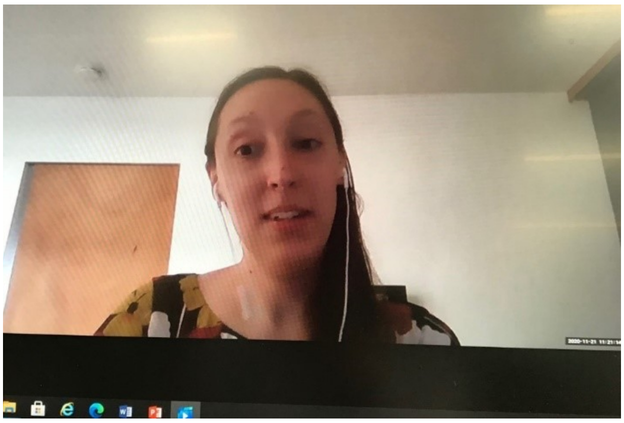
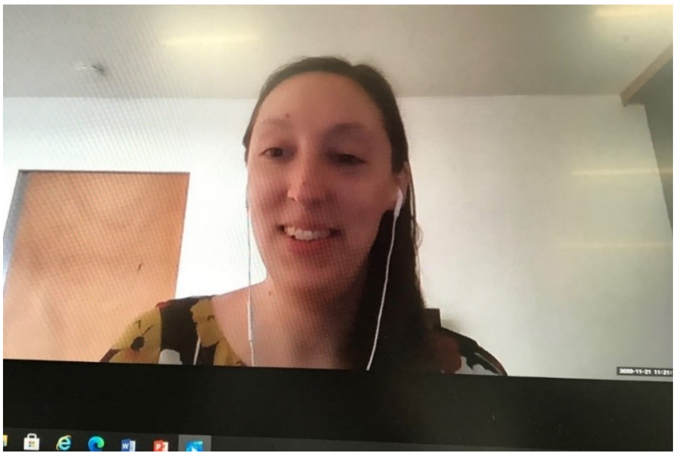
Taguchi, Asa. 2003. *Seiri kyūka no tanjō [The Creation of Menstruation Leave]*. Tokyo: Seikyūsha.

Yoshida, Teigo. 1990. "The Feminine in Japanese Folk Religion: Polluted or Divine?" In *Unwrapping Japan: Society and Culture in Anthropological Perspective*, edited by Eyal Ben-Ari, Brian Moeran, and James Valentine, 58-77. Honolulu: University of Hawaii Press.

Maura Stephens-Chu (マウラ・スティーブンス・チュ)



報告者紹介

2016 年に人類学専攻修士課程を取得、現在、米国ハワイ大学大学院社会科学研究科人類学専攻博士課程に在籍する。2017 年度国際交流基金日本研究フェロー兼お茶の水女子大学ジェンダー研究所の研究協力員として博士論文のためのフィールドワークの一環として調査研究を行った。「Conceal at All Costs: Lived Experiences of Menstruation in Japan」という博士論文はフェミニスト人類学と医療人類学の視点から日本において女性大学生の生理を中心とした経験のみならず生理用品業界を分析する。ハワイ大学にて日本文化の講師兼評定と課程サポートセンター（Assessment and Curriculum Support Center）の研究助手として働く。

本報告のベースとなる論文は以下の通り。
Maura Stephens-Chu, “From Sacred to Secret: Tracing Changes in Views of Menstruation in Japan,” *Silva Iaponicarum*（日林） 第60・61号, pp. 66-93.